慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	メンガー『国民経済学原理』の哲学的基礎
Sub Title	The philosophical foundations of Menger's Grundsätze der Volkswirthshaftslehre
Author	武藤, 功
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1989
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.81, No.4 (1989. 1) ,p.661(121)- 681(141)
JaLC DOI	10.14991/001.19890101-0121
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19890101-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」81巻4号（1989年1月）

メンガー『国民経済学原理』の哲学的基礎

武藤　功

1　はじめに
2　メンガー経済学の課題
3　カントの認識論
4　メンガーとカント
5　メンガー『原理』の体系
6　メンガーの「本質」とその形而上学的基礎
7　結び

1　はじめに

メンガー（Carl Menger, 1840～1921）が，その主著『国民経済学原理』[(1)]（以下，『原理』と略記する）によって近代経済学に一つの礎石を築いたことは周知の学説史上の事実である。彼は，ワルラス（L. Walras），ジェヴォンズ（W. S. Jevons）とともに，経済理論の革新，すなわち主観的価値論の確立に対して，「限界革命」の推進者という共通の評価をうけている。しかし，たとえ等しく限界効用理論に依拠しているとはいえ，メンガーの経済学には尚，ワルラス及びジェヴォンズのそれからは確然と区別されるべき特殊相が存することも事実である。そうした相違は，メンガーの思想の哲学的基礎を探究することにより，よりよく理解されうるものと思われる。本稿は，メンガーの著作に関して，その哲学的背景についての明瞭な画像を得ることを主たる目的としている。

ところで，メンガー経済学の哲学的性格については，これまでにもいくつかの解釈がなされてきた。それらは，メンガーをアリストテレスに結びつける解釈と，カントに結びつける解釈とに大きく分けることができる。

メンガーをアリストテリアンと特徴づける論者は，カウダー（E. Kauder）[(2)]やハチソン（T. W. Hutchison）[(3)]などに代表される。これらの論者は，メンガーが単に現象間の関係を研究するのみでは満足せず，或る意味での実在論的立場に立って，経済現象の「本質」の探究を重視した点に注目し

注（1）C. Menger〔29〕，尚，以下の本稿における引用文は基本的に邦訳書によっているが，訳文・表記などは必ずしもそれに忠実に従っているわけではない。この点は，本稿に引用されるすべてについて同様であることをあらかじめ断っておく。
（2）E. Kauder〔17〕〔18〕〔19〕
（3）T. W. Hutchison〔12〕〔13〕

ている。後に詳しく論じるように，メンガーは，表面的な相互依存関係の分析や数学的方法による分析を拒否しているのである。こうした側面は，アリストテレスによって創建され，科学哲学者ポパー（K. R. Popper）によって「方法論的本質主義」と呼ぶことを提案された思想学派に根差すものであるとされる。確かに，メンガーの本質主義的志向が，アリストテレスと基本的側面を共有しているということは可能ではあるが，はたしてどの程度まで，アリストテレス的解釈を許すものか，という点になると，はなはだ疑問の残るところである。この点はのちに詳しく論じることにしたい。

一方，メンガーをカントに結びつける解釈に先鞭をつけたのは，杉村広蔵[(4)]である。杉村のメンガーとカントとの対応の説明は，もっぱら彼の経済哲学の根本原理である世界観的考察にもとづくものである。杉村は，主観的価値論の提唱といった認識態度の転回の背後には，当然のこととして世界観の影響があるとする。そして，メンガーにおいては「経済性原理」にみられる実践的主体性の意義を重視し，それにもとづく経験界の認識論的統一を，思想界のカントへの復帰の運動の影響として捉えるのである。

また富田重夫は，いわゆる近代経済学における理論観なるものを，二つの流れに整理している[(5)]。第一の立場は，氏が「ミル＝ケアンズ＝ケインズ的立場」と称するもので，この系譜に属する人々は，その認識の根底に経験論を有しているものと特徴づけられる。

そして，これらの論者達とは対照的に，その認識の根底に先験論を有しているのが，第二の立場である「メンガー＝ウェーバー＝ロビンズ的立場」である。この系譜に沿う論者は，認識における悟性の能動的構成作用を積極的に認める点に特徴がみられる。富田は，このような整理にもとづき，メンガーの精密法則の論理的性格を明らかにしている。但し，メンガーの『原理』の具体的内容とカントの認識論（『純粋理性批判』）との論理的な対応については何も具体的には論じていない[(6)]。この点を考察することは，本稿の課題の一つでもある。

メンガーをカンティシャンと見るのは圧倒的に，わが国の学者であるが，外国ではドブレッツベルガーが，メンガーとカントとの対応を説いている[(7)]。しかし，カントのカテゴリー（純粋悟性概念）を生得的なものと解している点など，問題を含んだ考察となっている。

本稿は，基本的に杉村＝富田の業績の延長線上で，依然として残されていると思われるいくつかの点について，私見を開陳しようとするものである。その際つぎの点は，あらかじめお断りしてお

注（4） 杉村広蔵〔34〕〔35〕

（5） 富田重夫〔40〕

（6） 富田重夫は，「メンガー＝ウェーバー＝ロビンズ的立場」に属する人々の認識論を，基本的に新カント派のそれに帰している。歴史的な影響という観点からすれば，新カント派の認識論に帰することに何の誤りもない。しかし，一般に新カント派の功績とされる文化科学と自然科学の方法論上の二分は，少なくともメンガーに限って言えば，その思想と符合しない。また新カント派には，カントを矯小化する傾向が存することも否めない。以上の理由からして，私はメンガーの認識論は，新カント派のそれではなく，カント自身の認識論に帰すべきであると考える。

（7） J. Dobretsberger〔9〕

くのがよいだろう。近世の哲学では，そもそも哲学の出発点であった存在論を認識論に還元，あるいは統合して論じるのが慣行であるが，本稿では，近世以降の認識論とギリシア以来の伝統的な存在論との双方を，射程に入れて考察を進めていくことにする。なぜなら，先達の研究からもすでに知られ，また後に論ずるところから明らかとなるように，メンガーにおいては，認識論と存在論とが相即不離の関係にあると考えられるからである。

2　メンガー経済学の課題

さて，メンガーが『原理』で追求しようとした課題とは一体何だったのであろうか。その点を明らかにするには，『原理』初版公刊後にメンガーが携わった二つの方法論争を検討するのが最良の出発点である。ここで言う二つの方法論争のメンガーの論敵は，それぞれドイツ歴史学派の殿将であるシュモラー（G. Schmoller）と，ローザンヌ学派の創始者であるワルラスとであった。ドイツ歴史学派との方法論争の序幕に登場したのが，『社会科学，とくに政治経済学の方法についての研究』(8)（以下『方法』と略記する）である。その中でメンガーは，理論経済学と歴史的経済学とを峻別し，それを「一般的」なものの認識と，「個別的」なものの認識をそれぞれ目指すものの相違として説明している。

「現象の世界は二つの本質的に異なった観点のもとにこれを観察することができる。……。（一つの）研究方針は現象の具体的なもの，より正しくいえば，個別的なものの認識を，（他の）研究方針は現象の一般的なものの認識を目指しているのであり，したがって認識への努力のこのような二つの主要方針に応じて二つの大きな種類の科学的認識が現われる。そのうち，前者を簡単に個別的，後者を一般的とよぶだろう(9)。」

後者はまた，一定の現象が大なり小なりの正確さで繰り返され，事物の変化の中で反復する現象形態としての定型と，多かれ少なかれ，規則的に繰り返す一定の関係としての定型的関係との認識を含むものである。このことは，経済現象についてもあてはまるのであって，

「国民経済の領域でも，個別的認識と一般的認識，したがって現象の個別的なものについての学問と，その一般的なものについての学問とが現われる。国民経済の歴史と統計学は前者に，理論経済学は後者に属している。というのは，歴史と統計学とは，ちがった観点からではあるが，個別的な国民経済的現象を，理論経済学は国民経済的現象の現象形態と法則（一般的本質と一般的連関）を研究するという課題をもつからである(10)。」

さらにメンガーは，学問の以上の二つの大きな群とは性質が本質的に異なる第三の群として，実

注（8）C. Menger〔30〕
（9）C. Menger〔30〕S. 3，同邦訳書19頁。
（10）Ibid., S. 6，同邦訳書21-22頁。

践的科学あるいは技術学を挙げている。なぜなら，

「この種の学問は，現象を歴史的観点から意識させるのでもなければ，また理論的観点から意識させるのでもない。こうした学問は一般に在るものをわれわれに教えるのではない。その課題はむしろ一定種類の努力が，事情の相違に応じて，もっとも合目的的に遂行されるような原則を確立することにある。こうした学問は，事情に応じ特定の人間的目的が到達されるために在るべきものをわれわれに教える。[11]」

からである。

但し，上記の引用文には誤解を避けるために，若干の注釈が必要であろう。メンガーが「在るべき」ものというとき，それは対象の当為を問題にしているのではない。それは，対象化された限りでの実践的目的に対して，何をなしうるか，——いわば，目的合理性——を教える学を意味しているのである。その意味でメンガーは，存在と当為との鋭い分離の上に立っているのである。尚，メンガーは国民経済学の領域でのこれらの学として，国民経済政策と財政学とを挙げている。

続いて，メンガーは理論的研究における二つの異なる研究方針を区別する。一つが，現実的・経験主義的研究方針と呼ばれるものであり，もう一つが，精密的研究方針と呼ばれるものである。前者は，「現実的現象の根本形態であるが，その定型的形像の内部には特殊性のための（また現象の発展のための！）多少の余地のある[12]」現実定型と，「現実的現象の継起および共存のなかでの，実際との（しかしながらけっして例外のないことの保証されていない）規則性をわれわれに意識させる理論的認識[13]」としての「経験的法則」の獲得を意図するものである。後者の精密的研究方針とは，「現象の厳密な法則を確立すること，すなわち，ただ単に例外のないものとして現われるばかりでなく，われわれの認識通路の点からしてまさに例外のないことの保証を内包している，現象継起のなかでの規則性，一般に『自然法則』と呼ばれているが，『精密法則』と呼んだ方がふさわしい現象の法則[14]」の確立を目指す研究方針である。

さて，このような「精密法則」は，以下のような過程を通じて獲得されるという。まず，現実的なもののもっとも簡単な要素を発見する。それは，もっとも簡単であるが故に，厳密に定型的（すなわち，特殊性を許容する余地のない定型）と考えられなければならないものであると言う。これを発見する方法は，部分的にのみ現実的・経験的であるにすぎない。というのは，これらの要素が現実の中に，客体として実在しているかどうか，あるいは完全な純粋さにおいて独立に表示しうるかどうかは一切顧慮されえないからである。例えば，絶対的に純粋な金や酸素，あるいは絶対的に経済的目的しか追求しない人間などは，現実より定型として得られるものではあるが，反面われわれの観念のうちにのみ形成されるものである，という意味では非経験的なものにすぎないのである。

注 (11) Ibid., S. 7-8, 同邦訳書22-23頁。
(12) Ibid., S. 36, 同邦訳書45頁。
(13) Ibid., S. 36, 同邦訳書45頁。
(14) Ibid., S. 38, 同邦訳書48頁。

「したがって，精密的科学は……(中略)……もっとも簡単な・部分的にはまったく非経験的な要素から，こうした要素のすべての他の影響からの（同じく非経験的な）隔離のもとで，より複雑な現象がどうして発展するかを，精密的な（同じく観念的な！）程度をたえず考慮しながら研究する。」(15)

翻ってわれわれが『原理』に目を向けたとき，そこに見てとれる方法論的特徴は，若干の語句の相違はあるものの，上述の『方法』におけるメンガーの表明とほとんど同一と看做してよいことに気づくであろう。『原理』の序文で彼は次のように述べている。

「人間経済の複雑な現象を，その最も単純な，確実な観察を尚許すが如き要素に還元し，この要素に性質相応の測度を当て，かつこの測度を確保しつつこれらの要素から複雑な経済現象がいかに合法則的に生じ来るかをいま一度研究することに努力した。」(16)

メンガーは，すべての経済現象の底にある「窮極的かつ一般的な原因」を析出し，今度は逆に，それから出発して，個々の経済現象の派生する経緯を，因果の連鎖として解明しなければならないと考えている。さらに，メンガーに特徴的なことは，この「窮極的かつ一般的な原因」を「本質」(*Das Wesen*) とも称していることである。メンガーにとって，「知るということは原因を通じて知るということである」(17)と同時に，或る意味での「本質」主義的な方法を志向したものだったのである。

ところで，メンガーにとって，このような彼の企図に適う方法は，決して数学的方法ではありえなかった。この点は，ワルラスに宛てた書簡での，彼の中心的な主張をなすものでもあった。彼の抱いていた見解とは，次のようである。

「いわゆる純粋経済学が従わなければならない方法は，単に数学的と呼ばれるものでもなく，単に合理的と呼ばれるものでもないのです。われわれは経済現象の量的関係のみならず，その本質をも研究しなければならないのです。しかしこの窮極的なもの――例えば，価値・地代・企業者利潤・分業・複本位制などの本質――に関する認識に，いかにして数学的方法によって到達するのでしょうか。」(18)

メンガーにとって，複雑な経済現象を生起させる「窮極的かつ一般的な原因」は，単なる仮構ではなく，あくまでも一つの実在でなければならなかった。ワルラスの採用した数学的方法は，メンガーにとっては恣意的な前提から出発する，合理主義の誤謬と感じられたに違いない。(19)

注 (15) Ibid., S. 41-42, 同邦訳書50頁。
(16) C. Menger〔29〕S. Ⅶ, 同邦訳書3頁。
(17) C. Menger〔30〕S. 87, 同邦訳書89頁。
(18) ワルラス宛書簡1884年2月某日付 W. Jeffé〔14〕所収 Letter 602. また E. Antonelli〔1〕をも参照されたい。尚，ここで引用するメンガーのワルラス宛書簡は，丸山徹〔22〕294-298頁に訳出されている。

「分析の方法によっても，事実に対応しないような要素に行きついてしまったり，あるいは固有の分析なしに，勝手な公理から出発する研究者は，必ず誤謬に陥る。」[20]

と述べ，合理主義的あるいは数学的方法を採る場合に，しばしばこの弊に陥るものとして批判している。メンガーとて，これらの方法が彼の企図に相応しいものであれば，あえて反対はしなかったであろう。しかし，彼の企図に適う方法は，彼が分析的—総合的（構成的）方法と呼ぶものでしかなかったのである。メンガーは，先のワルラスに宛てた書簡の中で，さらに次のように言い放っている。

「交易において交換される財数量——数量は，時間と場所により変化する——は勝手なものなのか，それとも一定の法則に従うものなのでしょうか。それが問題なのです。この法則の探究が，あなたの御研究の主たる目的であると申し上げたなら，あなたの御研究を正しく理解していることになるでしょうか。もしそうであるとすれば同時に，あなたの研究の目的は，特殊な数学的方法によっては到達しえないということも明白となります。おそらく以下のようにすることが不可避なのであります。」「非常に複雑な現象を，最も単純な要素にまで遡ることであります。それ故，われわれは分析的な方法によって価格現象の窮極的な構成要素を確定しなければならないのであります。それから，それらの要素にふさわしい測度を当て，今度はこれらの窮極的なものの把握を通じて単純な要素から，人間の交易の複雑な現象の法則を確立するのであります。

それ故に，われわれがこの研究に際して採用する方法は，分析的——総合的あるいは分析的——構成的な方法であり，決して直接的には数学的方法とはならないのです。数学はとりわけ量の測定が重要である場合には，前述の認識の過程で重要な用途をもっています。しかしながら，それ自体は一つの補助科学としての性格をもつにすぎないのです。」[21]

引用が少々長くなったが，上述のメンガーの表白は，メンガーの志向した方法の意味をほぼ過不足なく語っていると思われるので，贅言は要しないであろう。

それでは，メンガーが理論経済学において追求した精密的理論は，いかなる課題をもつものなのであろうか。メンガーによれば，「精密的理論はいつもすべての現象のただ一定の側面だけを，それぞれのやり方でわれわれに理解させることを課題とするもの」[22]なのである。

メンガーが，精密的理論による「理解」（Verständniss）と言うとき，それは以下の議論の示すとおり，カント（J. Kant, 1724～1804）の認識論と同一の地平に立つものと思われる。

注（19） メンガーは『原理』の中で次のように述べている。交換において現われる財数量，すなわち「価格は単に偶然的なる現象，人間の諸経済間の経済的平衡の徴候にすぎない」（C. Menger〔29〕S. 172, 同邦訳書 171 頁）と。ここからも，メンガーの志向する「本質」主義的方法の意味を窺い知ることができよう。

（20） ワルラス宛書簡，1884年 2 月某日付．W. Jaffé〔14〕所収，Letter 602.

（21） ワルラス宛書簡，1884年 2 月某日付．W. Jaffé〔14〕所収，Letter 602.

（22） C. Menger〔30〕S. 52，同邦訳書58頁。

3　カントの認識論

カントの認識論上の貢献の一つは，人間の知識の成立を考察し，知識の成立の前提として，「知られるもの」と「知るもの」とを分離・対置させたことにある。J．ロックを祖とするイギリス経験論のように「知られるもの」のみを重視し，それが白紙の状態（タブラ・ラーサ）としての心（=知るもの）に反映されて知識が成り立つと考えたのではない。また逆に，大陸理性論の祖であるデカルトのように，「知るもの」(=cogito) から知識の成立を説いたのでもない。カントはこれら両者とは異なり，一方で物自体（Ding un sich）を，他方で純粋理性の積極的な働きを並立させたのである。カントにあっては，物自体は不可知なものとして押しやられている。すなわち，物自体は考えられるのみで，決して認識できないものとされているのである。われわれの感性を触発する限りで，論理的にそれは前提されざるをえないものであるが，われわれの認識能力をもってしては捉えることのできないものとされている。そして，認識能力によって捉えられたものを「現象」として物自体から分離し，われわれの認識をこの「現象」にのみ限定するのである。

カントの『純粋理性批判』の成立は，有名なD．ヒュームの因果律批判を媒介契機とするものである。この哲学史上のヒュームからカントへの展開に，メンガーが少なからぬ関心を抱いていたことは，ほぼ確実であると見られる。(23)

ヒュームはもちろん，イギリス経験論の流れをくむ者であり，認識の唯一の源泉を経験に求める立場に立つ。その限りでは，われわれの知りうることは，ある事象がある事象に継起するということのみであり，決してそれ以上ではありえない。つまり，二つの事象間の因果法則の必然性を求めることはできず，蓋然性を因果法則に与えることを必然的に帰結する。したがって，この考えを極端に押しつめれば，ヒュームの懐疑論は不可避なものとならざるをえない。

「ヒュームによって独断のまどろみから醒まされた」カントは，認識の確実性を基礎づけるために，『純粋理性批判』において，「ア・プリオリな総合的判断はいかにして可能なりや」(Wie sind synthetishe Urteil *a priori* möglich?) という根源的な問いを発し，それに答えるのである。

このカントの問いのなかには，二つの重要な区別が含まれている。その一つが，分析的と総合的との区別であり，他の一つが，ア・プリオリとア・ポステリオリとの区別である。

そこで，ここでは論理実証主義者カルナップ（R. Carnap）の解釈(24)を援用しながら，カントが本質的に意味したことを整理してみたい。

言うまでもなく，後に述べるようにカルナップのカント解釈と，カントが『純粋理性批判』の中

注（23）例えば，メンガー文庫（一橋大学）所蔵のユーベルベーク（F. Überweg）の哲学書 *Grundriss der Geshichte der Philosophie der Neuzeit* への，メンガーの書き込み（146-209頁）を参照されたい。

（24）R. Carnap〔6〕第18章「カントの綜合的ア・プリオリ」。

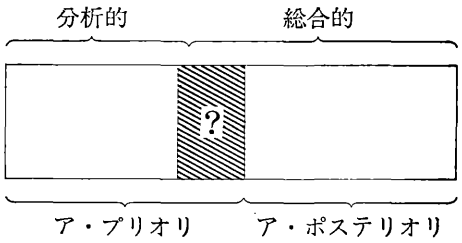
で展開した原型の思想との間にはある本質的な隔りが存する。しかし，本稿では論理実証主義者カルナップの眼を通じてのカント解釈を一貫して保持することにしたい。

周知のように，カントがその独自の哲学的学説体系を樹立して以来，その解釈をめぐっては，さまざまな見解が存在し，相当の解釈の「揺れ」がある。それゆえ，本稿ではあくまでも一つの態度決定として，カルナップのカント解釈を採用することにする。それは，カルナップ的なカント解釈は，その妥当性は別として，明瞭であるという点では，もっとも優れていると判断するからである。

さて，「ア・プリオリ」と「ア・ポステリオリ」との区別は，認識論的区別であって，前者は「経験的なものに絶対的にかかわりのない認識」を形容し，後者は逆に，経験に言及することなく正当化されることのありえないような認識のことである。また，「分析的」と「総合的」との区別は，いわば論理的な区別である。「分析的」判断とは，「述語Bが主語Aの概念のうちに含まれているものとして主語に属するような判断」である。それ故「分析的判断は解明的であって，述語によって主語に何ものも付け加えない」，換言すれば，用語の意味連関以外のものを何も含んでいない判断である。およそ分析的判断は，すべて矛盾律にもとづくものであるから，その本性からして，ア・プリオリな認識であることは明らかである。

他方「総合的」判断とは，「述語Bは主語Aと結びついているが，しかしまったくAという概念のそとにあるような判断」である。したがって「総合的判断は拡張的であり，主語概念において考えられなかったもの，或いは主語概念を分析することによって引き出し得なかったものを，この概念につけ加える」ものである。(25) カルナップ流に読みかえれば「総合的」判断とは，用語に賦与された意味を越えているものであり，世界の本性上の何かを言表している判断なのである。

そこで重大な問いは，論理的及び認識論的区別の分水嶺が共に一致するか否かということである。要するに，総合的であるとともにア・プリオリでもあるような知識がありうるかどうかということである。カントの主張は，そのような総合的であるものが，ア・プリオリでもあるものと重なり合う中間領域がある，というものであった。



論理実証主義を，はじめとする経験主義の立場は，いかなる「ア・プリオリな総合的判断」も存

注 (25) カントは，分析的判断の例として「物体はすべて延長をもつ」を，総合的判断の例として「物体はすべて重さをもつ」を挙げている。前者は，延長という概念が物体の概念に結びついていることを知るには，物体という主語と結びついているところの概念のそとに出る必要はないからである，とカントがいう時，それは明らかにデカルト以来の伝統を踏襲している。これに対し，論理実証主義者が「分析的」という概念を，「論理的に真」「言語の意味のみによって真」「論理的に必然的」「特定の科学の法則に依拠せずに論理の法則と規約上の定義だけから演繹可能」と規定するとき，明らかにカントがもともと託していた意味から著しく離れていると思われる。このようにカントの「分析性」の概念を，論理実証主義者が拡張したことは，両者の本質的な相違点であると考えられるが，カルナップ自身はそのような言明をしていない。

在しないと主張する立場として定式化することができる。カルナップは，カントがそのような判断が存在すると主張したのは，現代の科学の見地からすれば誤りであり，その点を修正し，「総合的」判断の世界を狭めたことが，論理実証主義の一つの貢献であり，カントとの本質的な相違点であると考えている。

ところでカントは，自然科学（物理学）がア・プリオリな総合判断を，原理として自分自身のうちに含んでいることを論証したが[26]，それを経験科学（経済学）の範囲に拡張しようとするのが，左右田喜一郎を草分けとする経済哲学の根本問題の一つであった[27]。

カントは，認識者の主観があってはじめて対象が主観に従って認識されると考えた。そして，人間の認識の二つの根幹として感性と悟性とを分けた。対象を直観する受動的な機能をもつのが感性であり，それを思惟する能動的な機能をもつのが悟性である。感性がなければ対象はわれわれに与えられないし，悟性がなければいかなる対象も思惟されないのである。「内容のない思惟〔直観のない概念〕は空虚だし，また概念のない直観は盲目である[28]」から，認識が生じ得るためには，感性と悟性の両者の結合が不可欠とされている。

『純粋理性批判』の「先験的原理論」は，感性の規則一般に関する学を扱う第一部門「先験的感性論」と悟性の規則一般に関する学を扱う第二部門「先験的論理学」とに分れている。「先験的感性論」において，感性には時間（Zeit）と空間（Raum）が，直観形式としてア・プリオリに備わっていなければならないことが論証される。さらに，「先験的論理学」において，悟性にはいわゆるカテゴリー（純粋悟性概念）——原因性（因果性）はその一つである——が，ア・プリオリに備わっていなければならないことが論証される。そして，われわれの理性は，これらのア・プリオリな諸原理をもって，対象に向かっていかなければならないのである。

「理性は自分の計画に従い，みずから産出するものしか認識しない[29]」からである。

以上がカントの明らかにした，自然科学に見られる認識の根拠である。こうして，自然法則は思惟法則となるのである。理性は，理性判断の諸原理をもって現実に立ち向かって行かなければならないが，得られた総合的判断は，究極的には認識主体の側から発しているものに依存しているのである。

注（26） カントの体系においても，ア・ポステリオリな総合的判断は容認されうると思うが，カントはそれに教訓的な意味しか与えていない。尚，本稿の主題であるメンガーは精密法則と経験的法則との共存を認めており，経験的法則のみでは科学の遂行は不可能であるといった言句は，メンガーの著作の中に一切見出せない。

（27） 左右田喜一郎は，経済学上の概念構成にあたってカント的見解を具現した。左右田は，物質主義定義に関して，このような概念構成は論理上不可能であるか，あるいは論理上ア・プリオリなものを前提してのみ可能であるとした。例えば「経済財」なる定義も，種々の財のうち，何ゆえにあるものを経済財とし，あるものを非経済財とするかという選択の根拠の中には決して存しない，という。このような概念構成が可能であるためには，論理上経験に先立つア・プリオリなものが存しなければならない，という。左右田はこのようなア・プリオリなものを「経済的文化価値」と称した（左右田〔36〕「カント認識論と純理経済学」参照）。

（28） I. Kant〔15〕，同邦訳書（上）124頁。

（29） Ibid.，同邦訳書（上）30頁。

4　メンガーとカント

本節では，メンガーとカントとの間に看て取れる，両者の論理的な関連を明らかにすることにしたい。

ところで，この両者の関連を明確に否定する論者も少なからず存在するので，まずそうした論者の主張を検討することから始めたい。

例えば，カウダーは，メンガーの「彼（＝カント）は理論経済学に純粋理性をなんら見ていない」という書込みをもって，メンガーがカンティシャンであることを否定している。(30) しかし，経済学が一つの学として自立したとされるのは，通常1776年にスミス（A. Smith）の『諸国民の富』（*An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*）が公刊されたことをもってであり，カントが『純粋理性批判』の第一版を公けにした1781年に，経済学がどれほどカントの意識にのぼっていたものであるかは，はなはだ疑問であると言うしかないであろう。(31) さらにカントの打ち建てた一般的な学における認識論も，一般的な学が分化した特殊な学――メンガーの場合は，もちろん経済学――を基礎づけるためには，特殊な学に固有な性格の制約を受けつつ認識論も若干の特殊化を迫られることは必定である。むしろこのメンガーの書込みは，メンガーが経済学の分野で，純粋理性に基づく学の構築を意図したものと解釈することも可能なのではないだろうか。有名なメンガーの，カントの『純粋理性批判』からの引用の試みは，このようなメンガーの意図を窺い知る恰好の証左となるであろう。(32)

そればかりでなく，論理的にもメンガーの経済学は，カントと同一の地平に立つと思われるが，その論拠は以下の論述が十分に示すことになるはずである。

すでに指摘したように，メンガーは，経済学の理論的研究を，現実的・経験主義的研究方針と精密的研究方針とに分け，それぞれにおけるいわゆる定型的関係すなわち法則を，経験的法則と精密

注（30）E. Kauder〔19〕カウダーはさらにユーベルベークの *Grundriss der Geshichte der Philosophie der Neuzeit*（一橋大学メンガー文庫に所蔵）における叙述，すなわち，数学的原理はわれわれの精神にのみ存する関係ではなく，自然つまりわれわれの精神の外にも存するという主旨の本文の脇に，メンガーが「これは私の学問にとって大変重要である」と書き込んでいることをも，メンガーがカンティシャンでないことの根拠としている。しかし，これはカウダーがメンガーの精密法則の本質を誤解していると思われる。メンガーの精密法則は，やがて本文で明らかになるように，現実の叙述ではなく，叙述の手段であるにすぎない。そして，それはあくまで認識主体の側に属するものなのであり，それが自然にも存するとは，われわれが精密法則でもって現実を「理解」できるということであり，そのことはいわば自然科学での「測定」にあたるものである。

（31）八木紀一郎もカウダーのこの見解について言及しているが，その内容はいささか奇妙でもある。八木は，このメンガーの書込みを「むしろメンガーが実践理性の領域での理論構成の基礎づけという野心的企図を抱いていた証左とも考えられる」ものとしている。メンガーは，カントが理論経済学になんら純粋理性を見ていないので，その理論構成の基礎を実践理性に見ようとしたという意味であろうか。もしそうであったとすれば，「カントは実践理性をなんら理論経済学に見ていない」ということも言えるのではないだろうか。八木〔42〕146頁参照。

法則とに区別した。経験的法則は，「現象の定型と定型的関係を，その『完全な経験的現実性』のうちに，したがって，その本質の全体性とあらゆる錯雑性のうちにあらわれるがままに研究する」[33]ことによって見出される法則であり，「その法則というのは単に一定の現象形態に属している現実的現象の継起及び共存の，観察によって確証された事実上の規則を意味しているにすぎない」[34]のである。メンガーが，このような法則的認識を思考する場合には，直接経験される現実が，認識の対象なのであり，両者の区別はなされていない。法則を法則たらしめる規定性は，その必然性にあると考えられるが，このような法則における必然性は，攪乱的・派生的要因が作用しないか，無視しうる程度のものにすぎないと考えないかぎり，現実の傾向という如き蓋然性と考えられるにとどまらざるをえないのである。

しからば，獲得された法則の例外のないことを，完全に保証する認識とは，如何にして可能となるのであろうか。メンガーが，そのような現象の厳密な法則の確立こそを，『原理』で追求してきたことは既に見てきた通りである。

それは，経験的現実と思惟的秩序としての現実との峻別及び認識主観による客観の構成というカント的な認識の原理を前提にしてであると言えよう。そこに，あたかも「コペルニクス的転回」に譬えることも許されるであろう。メンガーの重要な理論上の革新が存するのである。

注 (32) メンガーのカントへの直接の言及は，公刊された彼の著作の中には見られない。『原理』初版の公刊後，その改訂のために用意した「稿本」（一橋大学メンガー文庫所蔵）の中に，二箇所，カントの『純粋理性批判』からの引用が書き込まれているにすぎない。メンガーは，カントの『純粋理性批判』の第一版（1781年）の序文から次の章句を引用している。

「現代ではあらゆる途が（一般の定説によれば）試みられて，しかも徒爾に終ったあげく，学問において有力な傾向をなすものは倦怠とまったくの無関心とである。——これは混沌と暗黙とを産む母であるが．しかしまたそれと同時に，用処の不適切な努力のために，学問が却って不分明となり，混沌に陥り，また役に立たなくなったあかつきには，やがて学問を改造し，開明する本源となり，少なくともその序曲をなすものである。……(中略)……もはや見せかけの知識に釣られていない現代の成熟した判断力の結果である。」

また，『純粋理性批判』の第二版（1787年）からは次の部分を引用している。

「もし，この取扱いが諸般の準備を調えたうえいざ目的に達しそうになって頓挫するとか，或いはまた同じ学問に携わっている人達を共同の目的を追求する仕方について一致させることができない場合には，かかる研究はまだまだ学として確実な道をあゆんできたとは，とうてい言い得ないのであって，まだまったく模索にすぎないと言って差支えない。それだから できればこういう確実な道を発見するということだけでもすでに理性に対する功績なのである」（参考文献〔20〕12-15頁参照。尚，引用文の訳については篠田英雄訳〔15〕に拠った）。

ここで，メンガーが「この取扱い」を「学問」と言い換え，「理性に対する」の部分を削除しているのであるが，そのことも首肯できよう。もちろん，これらの引用をもって，メンガーの認識論の基礎が，カントにあるという即断は許されるものではない。両者の関連は，あくまでも論理的な分析をもって判断されなければならない。その意味で，私はこのメンガーのカントからの引用を過大評価するつもりは毛頭ない。しかしながら，少なくともメンガーが経済学において恰もカントが理性批判を通じて形而上学の新紀元をつくりだそうとしたのと同じ意図を抱いていた，ということは十分窺い知ることができるのであって，カウダーの所論は不十分なものだと言えよう。尚，杉村〔35〕をも参照されたい。

(33) C. Menger〔30〕S. 34，同邦訳書43頁。

(34) Ibid., S. 35，同邦訳書44頁。

メンガーは精密法則について，次のような重要な命題を述べている。

「ただ一回だけでも観察されたことは，厳密に同じ事実的条件のもとでは，絶えず繰り返す現象とならなければならない……または本質上は同じことだが，一定種類の厳密に定型的な現象には同じ事情のもとではいつも同じく一定の他の種類の厳密に定型的な現象が，しかもわれわれの思考法則からして必然的に，継起しなければならない[35]」

この命題の中に示されている重要な論点は[36]，精密法則の経験との関連は，「ただ一回だけでも観察され」ることが必要なことであり，それが繰り返し現実において生起するか否かは問わない，ということである。さらに，ここで問題となるのは，ある現象生起の条件の同一性なのであり，その同一性の存在が経験的現実において保証される必要はないのである。このことから法則の実証性は，経験的な現実性から分離され，認識対象に関するものとなるのである。メンガーも上述の命題の中で明確に述べているように，精密法則の本質は「思考法則」（＝思惟法則）なのであり，それはあくまで認識主体の側に属するものなのである。したがって，「経験はこの原則の例外をけっして与えないばかりでなく，批判的な悟性には例外といったものはむしろまったく考えることのできないもの[37]」なのであり，それ故「国民経済の精密的理論を完全な経験によって験証することはまったく方法的な背理」なのである[38]。

以上のことから，メンガーの精密法則が，カントの認識論と同一の地平に立つことは既に明白かと思われる。

5　メンガー『原理』の体系

さて，これまでの考察は主としてメンガーの方法論的著作に依拠しての分析であった。言うまでもなく，方法論的著作は，生の体験と結びついた問題意識とその理論的展開とを前提として，内在的・追考的なその整理的役割を演ずるものにほかならない。したがって，これまでの考察からメンガーがカントと同一の地平に立つということは認められるにしても，『原理』の理論的内容に立ち返って，そのことを確証しておくことは，必要なことである。

ここでメンガーがカントと同一の地平に立つとは，メンガーの『原理』の理論的命題がカントの意味での「ア・プリオリな総合的判断」に相当することを意味する。

ところで，論理実証主義的な解釈をもってすれば，メンガーの『原理』の命題の中には「分析的」な，それゆえア・プリオリな命題が含まれていることも確かである。例えば，次のような命題がそれである。

注（35）Ibid., S. 40, 同邦訳書48頁。
（36）富田重夫〔40〕88-90 頁の分析に負っている。
（37）C. Menger〔30〕S. 40, 同邦訳書48頁。
（38）Ibid., S. 54, 同邦訳書60頁。

「高次財は，その財性質に関し，それが生産するのに役立つ低次財の財性質によって制約される」[39]

「高次財に対するわれわれの需求はこれに対する低次財の経済的性格によって制約されている」[40]

あるいは一般に，

「高次財の経済的性格は，この高次財を用いて生産せられる低次財の経済的性格によって制約されている」[41]

これらの命題は，低次財を，われわれの欲望の満足に直接に役立つ財，高次財を，低次財の作出に役立ち，間接的にわれわれの欲望の満足に適する財と定義したことに必然的に由来するものである。その意味で，用語の意味連関以外のものを何も含んでいない判断である。

ところで，メンガーの『原理』の体系の中には，論理実証主義的な視点からも，「ア・プリオリ」で「総合的」と看做しうる判断が含まれていると思われる。それは，メンガーが「価格の理論」で展開した言明においてである。

メンガーは，『原理』で価格の理論の基礎として「価値の理論」を，さらに両者を架橋するものとして「交換の理論」を展開した後，「価格の理論」の叙述に進む。

メンガーは，精密的研究方針に従い，複雑な経済現象を単一の経済主体とその諸努力に還元した。しかもそれを内面的な精密理論的観察にもとづいて，その主体の，外的契機の如何には関わりのない，人間本性に根差す本源的要因に，見いだしたことはすでに述べたところである。

そして，「交換の理論」「価格の理論」は，こうした経済主体の内面的な本源的要素が，経済的行為に発現した具体的な経済諸現象に説き及ぶ箇所である。

メンガーは価値論と交換論を経て，最も簡単な現象形態として孤立的交換における価格形成を論じ，複雑な現象形態における価格形成へと説き進む。すなわち，独占取引における価格形成より双方的競争あるときのそれへとである。しかし，それらの価格形成の根本的な説明原理は同一のものである。

そこで，メンガーが最後に論じた売手と買手の双方に競争のある場合（但し，この際供給側の供給量はあらかじめ定められていることに注意）における価格形成の理論をみてみよう。

右に掲げた表は通常メンガー表と称されているものであり，ここで B_1，B_2，B_3 などは個々の農夫あるいは農夫群を表わす。さて，農夫は多量の穀物を支配しているが，一頭

	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
	メッツェンの穀物							
B_1	80	70	60	50	40	30	20	10
B_2	70	60	50	40	30	20	10	
B_3	60	50	40	30	20	10		
B_4	50	40	30	20	10			
B_5	40	30	20	10				
B_6	30	20	10					
B_7	20	10						
B_8	10							

注 (39) C. Menger, 〔29〕 S. 21, 同邦訳書19頁。
(40) Ibid., S. 67, 同邦訳書64-65頁。
(41) Ibid., S. 68, 同邦訳書64頁。

の馬も有していない場合を考える。そこで，農夫 B_1 にとっては，彼の手中に入る一頭目の馬は彼の穀物の80メッツェンに等しい価値をもち，第二の農夫 B_2 にとっては，彼の手中に入る一頭目の馬は70メッツェンの価値をもつ（以下 B_3，B_4……B_8 についても同様）ことを示している。

そして横の欄の数字は，新たに彼の手中に入る，追加的な一単位の馬と等しい価値をもつ穀物の量を示している。

そして，メンガーの根本命題は，最高評価者が交換に成功し，価格すなわち「交換において現れる諸財量」は，最高交換能力者二人の評価の限界内に定まる，ということである。

例えば，二人の供給競争者 A_1，A_2 が存在し，合計三頭の馬（A_1 は二頭，A_2 は一頭）を市場に出したとすると，農夫 B_1 が二頭の馬を，農夫 B_2 が一頭の馬を，70メッツェンの穀物と60メッツェンのそれとの間に形成される価格で買い求めることになる。

ここでは，メンガーの理論的展開の一層の詳論を割愛して，これらの諸命題の性格を考察することにしたい。

私の主要な主張は，これらの命題がカントの意味での「ア・プリオリな総合的判断」に相当するということである。

これらの命題が「総合的」であることは，まず問題あるまい。「価格」（あるいは交換）という経済現象は，経済という具体的な世界において観察可能な事実であり，それらについて言及している命題だからである。

ただし，それらの命題が「ア・プリオリ」であることについては，多少の説明を要しよう。ワルラスに宛てた書簡の中で，明白に述べているように，メンガーにとってワルラス流の理論設定は，「勝手な公理から出発する」合理主義の誤謬に陥ったものにほかならなかった。たとえ，価格受容者（price taker）として行動をする経済主体を想定するにしても，メンガーにとっては，それ自体が「窮極的かつ一般的な原因」に遡って説明されなければならないのである。

したがって，メンガーの精密法則は，経験主義者の単なる仮説的認識とは異なるものである。経験主義的な科学者は，仮説を設定し，そこからの演繹を通じて経験的な帰結を導出する。その際，仮説そのものの実在性は，不問に付し，経験的検証に耐えうる限り，その仮説的認識を真なるものとして暫定的に認める立場をとる。

メンガーが，これらの立場から離れる点は，彼が，経済現象の「窮極的かつ一般的な原因」と考えた「人間の欲望とその満足」を一つの実在として，確実に存在するものと確信している点である。

その存在論的側面の考察は，次節に譲るとして，メンガーの精密法則の妥当性は，この経済現象の「窮極的かつ一般的な原因」の実在性に由来している。さらに，そこから得られる無矛盾な理論体系の妥当性は，現実的経験との照合（＝検証）によるものではない。私は，その意味で，メンガーの精密法則が「総合的」にして「ア・プリオリ」な命題であると考えるのである。

最後に，このようなカントの「ア・プリオリな総合的判断」を，科学の世界から排除することを主張してきた論理実証主義の立場に簡単に言及しておくのがよいだろう。

17世紀の近代科学の成立の時期に，それを思想的に支えたのはデカルトであった。デカルトは，自然の機械的数学的認識により，中世以来の神秘主義，目的論的認識と訣別する。

しかし，一方それは神への探究の帰結でもあった。あらゆるものを疑って残るところの純粋な精神こそ生得の観念であり，それは神によって支えられているのである。デカルトにおいて，精神は身体から徹底的に分離されるが，この身心二元論は同時に，精神と身体の分離という避けがたい矛盾を背負いこむことになる。

19世紀に至り，科学は，自然科学も社会科学も，神から離れ独立することになる。この世紀，ニーチェ（F. Nietzsche）が「神は死んだ」と，またマルクス（K. Marx）が「宗教は麻薬である」と宣言する。こうした科学と宗教との分離は，同時にデカルトの矛盾を，矛盾ではないものとして積極的に承認することでもあった。すなわち，物質的機械的認識はデカルトにおいて分離されたが，そのことのみを追求するところに科学の「安定」と「発展」とがもたらされたのであった。

論理実証主義が，自らの哲学を，科学と矛盾しない哲学と標榜するとき，それは明らかに，科学のこの系譜に属するものである。その限りでは，幾多の反論が可能ではあるが，論理実証主義の哲学は，自然科学においてはかなりの，社会科学においてもある程度までの，成功を納めたことは認めねばなるまい。

しかしながら，社会科学固有の特徴と困難さは主体と客体とが，ともに人間であり，それらの統合が要請される点に存する。デカルトにおいて分離された「精神」は，さまよい，不安にあえぐことになった。そして，そのデカルトの分離の矛盾の超克を，予料したのが，大陸の経済学においてはメンガーだったのである。

無論，われわれがわれわれ自身を見るとき，その客観性の基準が問われよう。おそらく，どこに視点を据えれば，客観的でありうるかの基準を誰も持ち合わせてはいないであろう。

それ故，自然科学的方法の確実性と明証性の中にそれを求めようとする志向が生まれることにもなる。

それにもかかわらず，論理実証主義的に，実体の把握できない「精神」及び精神の諸表象を「透視」として，科学から徹底的に排除してしまう態度にも不満が残るのである。

私は，メンガーの経済学が，あまりにも理論的認識の側からの物心の統合であった点で，両者の統合が成功したとは評価できないが，その試みには注目しなければならないと思っている。その意味で，論理実証主義的に，メンガーの精密法則を，仮説（あるいは公理）とそこからの演繹的体系として，それ故，「分析的」な命題，あるいは「ア・ポステリオリな総合的」命題として解釈することは，メンガーの意図を見失うことになるのではないかと思う。

6　メンガーの「本質」とその形而上学的基礎

最後に，メンガーの形而上学的前提の背景をめぐる問題の検討に移ることにしたい。それにはま

ず，メンガーとドイツ歴史学派との間の方法論争での一つの争点を，想い起こすのがよい。ドイツ歴史学派が，実体概念として捉えた「民族精神」を形而上学的な統一体として前提し，そこから他の一切が流れ出す実在根拠（Realgrund）と考えたことは，あまねく知られている事実である。メンガーは，国家や民族という集合体が，それ自体経済的行為をすると考えるのは，まったくのナンセンスであるか，単なる幻想にすぎないとして，厳しくこれを批判する。かくして，メンガーにとって最大の一つの目的は，集合体における実体概念の破壊であったであろう。メンガーのこのような目的態度は，いわゆる方法論的個人主義をもたらす。

実体概念とは，「実体―属性」の枠組に，具体的には「主語―述語」の思惟形式に立脚している。それは，生成変化する現実のうちにあって不変なものにとどまる実体を前提とする。その実体を，どのようなものと解するかによってさまざまな実体概念の形態が生じうる。例えば，プラトンのイデア，アリストテレスの個物などである。アリストテレスの実体概念では，外延の拡大と内包の制限によって到達する高位の類，普遍的概念が，空虚な表現とならないために「形相」の思想が根底におかれているのである。

17世紀まで，この実体概念の枠組は守られてきたが，カントによって，この「実体―属性」は純粋悟性概念の中に，関係のカテゴリーの一つとして埋めこまれることになる。一般認識論的見地のもとに，われわれに対する外界を実在の世界とよぶことにすれば，かくして「実体―属性」の形而上学的前提は，実在から観念の中に移しかえられることになる。

メンガーの窮極的立脚点はカントにある。メンガーにあっても，実体概念は破壊され，現象における秩序が，専ら認識主体の主観的概念のうちに位置づけられることになる。メンガーは言う，「財の経済的又は非経済的性格は財に付着せるもの，財の属性ではなくて，いかなる財も，それが上述の数量関係（需求 Bedarf が支配しうべき財数量より大なる数量関係――武藤）に入りこむ場合に，内的属性又は外的契機の如何に関わりなく経済的性格を獲得するし，またこの数量関係がその反対に転化する限り，その経済的性格を喪失する[(42)]」と。

しかしながら，このように実在界の実体概念を観念の中に還元しえたとしても，依然として，人間という主体の常住不変性は実体であり続けるのである。すなわち，デカルト以来の伝統として，思惟する自我にあっては自我の精神は実体であり，思惟はその属性であるとされる。自我は，存在として他のいかなるものをも必要とせず，その存在は「思惟する」ことにより知られるのである。結局のところ，メンガーの方法論的個人主義は，究極的な存在論的基礎として，実体概念を承認しているのである。メンガーが，欲望を有し，それを満足する手段を自由にしうる人間を，人間経済の出発点として，また，複雑な経済現象の「本質」として把えるとき，このような思考様式にもとづいているのである。

こうした立論を前提とすると，メンガーの経済学をアリストテレスに結びつけるカウダーやハチソンらの所論は，反省を迫られることになろう。

注（42） C. Menger〔29〕SS. 60-61，同邦訳書58頁。

アリストテレス流の本質主義は，普遍名辞の指示するそれぞれの実在的もしくは真なる本性を明らかにしようとする。こうした論者は科学的問題を，例えば「物質とは何か」あるいは「力とは何か」というように定式化する傾向がある。そしてこの種の設問に対する透徹した解答をもとめることが，科学的研究の重要な前提条件であるとする。

こうした本質主義の立脚している思考様式は明らかに「実体—属性」の枠組である。

たしかに，社会的に生起するさまざまな経験現象を窮極において統制し，それらを経済現象たらしめている実在的な本性を明らかにしようとするのが，メンガーの狙いではあったが，両者の間には表面的な類縁性以上のものは存しない。なぜなら，すでに述べたように，メンガーはカントとともに，実在界の実体概念を観念の中に還元し，関係的思惟にもとづいてのみそれを把握するからである。

「実体—属性」の枠組は，カントによって関係のカテゴリーの一つとして埋めこまれることになった。そして，直観の多様性を結合する悟性の機能は，カテゴリーの根底に存する先天的な統一能力であり，純粋統覚あるいは根源的統覚と称されたものである。

しかしながら，すでに明らかにしたようにメンガーにおいても依然として，人間主体の常住不変性は実体概念にとどまり続けるのである。メンガーのこの側面に限るならば，アリストテレス的な解釈を施すことも許されよう。しかし，人間主体の常住不変性を実体概念として前提する思考は，カントにあっても認められるものなのである。

したがって，すでに明らかにしたようにメンガーの認識枠組が窮極的にカントにある以上，メンガーのいう「本質」も，カントと最も整合的に結びつくものであり，アリストテレスとの接合は，あまりに安易すぎるのではなかろうか。

ところで，このように考えてきたとき，メンガーが『原理』初版の序文で述べた，次のような課題は果たして，真に解決されたのであろうか。メンガーは，『原理』初版の序文で，次のように述べている。「われわれは，国民経済現象の合法則性を，人間の意思自由を理由として否認する人々の意見には反対したいと思う。なぜならこれによって精密科学としての国民経済学が一般に否定されるからである[43]」と。

このように，意思自由を承認することと経済行為の合法則性との両立を追求しようとしていたメンガーにとっては，真に自由な経済的行為においてその法則性を追求しなければならなかったであろう。しかしながら，メンガーのとった態度は，以下の言句にみられるように単に問題を回避したものにすぎなかったと言えよう。すなわち，「理論国民経済学は経済的行為に対する実際的提案を取扱うのではなく，人間が欲望満足に向けられた先慮的行為を展開するにあたってその基底となる諸条件を取扱うものである[44]」と。そして，上述のことは，『原理』初版公刊後に，ハック（F. Hack）によって批判された点でもあった[45]。

注（43） Ibid., S. IX，同邦訳書 序言4頁。
（44） Ibid., S. IX，同邦訳書 序言5頁。
（45） F. Hack〔10〕

『原理』初版公刊後すぐに始まる長いメンガーの方法論的反省の時期にあって，上述の問題が，メンガーにとって一つの大きな課題であったことにほぼ間違いはない。そのことは，メンガーが稿本では，上記の引用文を抹消していることからも窺い知ることができるのである。そしてその思索の結晶として，われわれは第二版の始めに独立に設けられた「欲望 Bedürfniss の理論」を，知るのである。

メンガーの窮極的立脚点は，カントの認識論（『純粋理性批判』）にあった。そのようなメンガーが，意思の自由を問題にするとき，カントとともに『実践理性批判』の世界に進むのが容易に開かれた道であったろう。

カントは，『純粋理性批判』の中で，人間の認識能力を「現象」の上に限定し，そこでの機械論的因果律の体系を築きあげた。そして，カントは「現象」の彼方にある不可知の世界を「物自体」として残すことにより，人間の自由といった因果律ではなく，道徳律に従う実在を救う余地を留保していたと言える。

『実践理性批判』で問題とされるのは，いかにして意思を客体に関してア・プリオリに決定しうるかということである。換言すれば，理性と外的事物との関係ではなく，内的なもの，意思との関係であり，意思の決定こそが問題となるのである。人間の行為は，快・不快，衝動と欲望（メンガーの言う「欲望」との質的差異に留意されたい！）といった感性的動機から出発するので，純粋な理性による意思決定が存在するかということは確実ではない。そこで，『実践理性批判』では，感性的な意思決定が唯一のものであるか，それともより高い欲求能力があって，実際，意思が外的な動機に従うのではなく，理性のみから出る原理に従うかが問題とされ，それに論証を与えたのである。

実際，メンガーの「欲望 Bedürfniss の理論」とカントの『実践理性批判』との親和性を見てとることは，比較的容易である。

メンガーが，人間経済の出発点に据えた人間の欲望 Bedüfniss とは，人間の生命及び福祉の維持・増進のために，純粋に内的に，すなわち財の存在の有無といった外的な条件の如何に関わりなく規定されるものである。そしてそれは，理性的な次元において捉えられたものなのである。すなわち，それは不快感・不安・情欲などといった，情緒的（生理的）次元での「欲動 Trieb」や，欲動を和げるために対象物を獲得しようという，いわば感情的な次元での「欲情 Begierde」とは区別されるものである。これらは，人間本性を不完全に表現しているにすぎず，それゆえにまた，自己の生命と福祉との維持を目ざす人間の努力の（説明の）ための基礎として不完全である，と言う。ここでメンガーは，人間の欲望が情緒的—感情的なものから，理性的なものへと進展する過程を想定するのである。

ところで，このようなカント的なア・プリオリな理性的欲望認識は，内容空虚な単なる形式にとどまるものであるという批判もありえよう。そこで，八木紀一郎の言うように[46]，メンガーは，最終

注（46） 八木他訳，メンガー『一般理論経済学』の解説「メンガーの探究と『経済学原理』の改訂作業」参照。

的にアリストテレス的アプローチ，すなわち自然界に理性的欲望にいたる各段階の認識を想定し，人間においては特に欲望認識の理性化のプロセスを想定するというアプローチに近づいていったのであろうか。私はこれに対して否定的に答えたい。メンガーにあっては，「欲望」という主観的世界と因果関係の支配する客観的世界とが，「稀少性」を軸にして統合されているのである。

さらに私は，次の点においてもメンガーはアリストテレスから完全に離れなければならないと思っている。それは，メンガーが目的因との混同としての目的論的説明を排除している点である。目的論とは，何らかの意味で意思的なものが目的を設定し，それを目指してあらゆる事象が因果ではなく，目的のためにそこへ向かって推移するという思考にもとづく。外的世界のあらゆるものが，因果の法則に支配されているとは，『原理』の初版においても第二版においても明白に述べられているところである。単に目的性が，因果性の時間軸を逆転したにすぎないのであれば，その思考様式は完全に因果性の論法に従っていると言える。また，因果的説明の根底に目的論的要因を導入することも，なんらアリストテレス的な目的論とは関係がないのである。

7 結　び

本稿は，メンガーの『国民経済学原理』を哲学的観点から明らかにすることを主要な課題としたものであった。従来，それに対する解答としては，アリストテレス的な解釈とカント的な解釈とが与えられてきた。本稿は，認識論的にも存在論的にも，一貫してメンガーの経済学は，カント哲学と結びつくものであることを明らかにした。まず，認識論的には，精密的理論の先験論的な性格を明らかにした。アリストテレスの哲学では，そのような認識枠組を，提供しえず，その意味でまずわれわれはアリストテレス的解釈から離れねばならない。

次に，従来の研究では，メンガーの方法論的著作によってのみ，その性格が検討されてきたが，それは方法論研究の本来の性格からして一面に偏向していたと言わねばならない。そこで本稿では，『国民経済学原理』の具体的な理論的展開の中から，カントの意味での「ア・プリオリな総合的判断」を提示してみた。

その際，論理実証主義者カルナップ流に解釈された「総合的」で「ア・プリオリ」な命題を判定の基準としたので，メンガーの高次財に関する諸命題は排除された。そこで示された「ア・プリオリな総合的判断」の例は，価格（あるいは交換）の理論における諸命題であった。その「総合的」である所以は問題ないにしても，その「ア・プリオリ」である所以は，メンガーのいう「窮極的かつ一般的な原因」（=「人間の欲望とその満足」）が，単なる仮構ではなく，ある意味での実在であると考えていたことによった。その点で，「ア・プリオリな総合的判断」を一切認めない論理実証主義者とも，袂を分つのである。

かくして，われわれは再び，メンガーの言う「本質」をめぐって，その哲学的考察に連れ戻された。

簡単に要約すると，次のようである。まず，メンガーが，実在界（われわれの外界）の実体概念を

破壊し，カントとともに関係的思惟にもとづいて外界の世界を認識していることを示した。

しかしながら，実在界の実体概念を観念の中に還元したとしても，人間という主体の常住不変性は実体であり続ける。経済学的観点から，メンガーが欲望を覚える人間を，あらゆる経済現象の「本質」として据えたのは，このような思考様式にのっとってであると思われる。この人間主体の常住不変性に限れば，アリストテレス的解釈も認められると思うが，実在界の実体概念を破壊している点で，アリストテレス的解釈は，反省を迫られよう。

更に，眼を初版から第二版に転じて，その冒頭に加えられた「欲望 Bedürfniss の理論」を考察した。そこでは，初版では充分に解決されたとは言えない「意思自由」の問題がかかわってきた。そしてその解釈を，カントの『実践理性批判』に求めたのである。そして，メンガーにあっては，因果律に従う実在の世界と，形式的なア・プリオリな意思決定の世界とが，「稀少性」を軸にして統合されていると見ることができるのであった。メンガーにおいて，目的論的要素が存在するとしても，それは，アリストテレス流の目的論——目的因の過度の強調による——とは，何ら関係がないことを示し，全体的にみて，メンガーの経済学が，カントの哲学と最も整合的であることを明らかにしようと企図したのである。

参考文献

〔1〕 Antonelli, E., "Léon Walras et Carl Menger" *Economie Appliqée,* vol. 6 (1953), 269-287.

〔2〕 Aristotle, *Metaphysica* (出隆訳『形而上学』上・下，岩波文庫).

〔3〕 遊部久蔵「メンガー財論の基本問題」『三田学会雑誌』64巻11号 (1971), 18-34.

〔4〕 東清二郎「メンガー経済学の方法論的性格」『人間科学研究所紀要』2 (江戸川学園) (1985), 137-191.

〔5〕 Bloch, H. S., *La Théorie des Besoins de Carl Menger,* (Diss., Paris, 1937.)

〔6〕 Carnap, R., *Philosophical Foundation of Physics,* (Basic Books, N. Y. 1966.) (沢田允茂・中山浩二郎・持丸悦朗訳『物理学の哲学的基礎』岩波書店，1968).

〔7〕 Cassirer, E., *Substanzbegriff und Funktionsbegriff* (Verlag von Bruns Cassirer, Berlin, 1910.) (山本義隆訳『実体概念と関数概念』みすず書房，1979).

〔8〕 ———, *Zur Logik der Kulturwissenschaften, Fünf Studien,* (Göteborg), 1942. (中村正雄訳『人文科学の論理——五つの試論』創文社，1975).

〔9〕 Dobretsberger, J., "Zur Methodenlehre C. Mengers und der Österreichisen Schule" *Zeitshrift für Nationalökonomie,* Bd. 12 (1949), 78-89.

〔10〕 Hack F., "Dr. C. Menger, Grundsätze der Volkswirtschaftslehre" *Zeitshrift für die gesamte Staatswissenshaft,* Bd. XXVIII (1872), 183-184.

〔11〕 林治一『オーストリア学派研究序説』(有斐閣，東京，1966).

〔12〕 Hutchison, T. W., "Some Themes from Investigations into Method" in J. R. Hicks and W. Weber (eds.) *Carl Menger and The Austrian School of Economics* (Oxford Univ. Press, Oxford 1973) 15-37.

〔13〕 ———, *The Politics and Philosophy of Economics* (Blackwill, Oxford, 1681).

〔14〕 Jaffé, W., *Correspondence of Léon Walras and Related Papers,* 3 vols. (North-Holland, Amsterdam, 1965).

〔15〕 Kant, I., *Kritik der reinen Vernunft* (篠田英雄訳『純粋理性批判』岩波文庫).

〔16〕 ———, *Kritik der praktishen Vernunft*（波多野・宮本・篠田訳『実践理性批判』岩波文庫）.
〔17〕 Kauder, E., A History of Marginal Utility Theory (Princeton Univ. Press, Princeton, 1965).
〔18〕 ———, "Intellectual and Political Roots of the Older Austrion School" *Zeitshrift für Nationalökonomie,* Bd. 17 (1958) 411-425.
〔19〕 ———, "Menger and his Libray"『経済研究』第10巻1号,（1959), 58-64.
〔20〕 ———, *Carl Mengers Zusätze zu "Grundsätze der Volkswirtschaftslehre" Bibliotek der Hitotsubashi Universität,* Tokyo (1961).
〔21〕 気賀健三「オーストリア学派の経済学方法論」『三田学会雑誌』64巻11号（1971), 1-17.
〔22〕 丸山徹『座談経済学』（サイエンス社, 東京, 1984).
〔23〕 ———,「高橋誠一郎教授の主観的価値学説前史」『三田学会雑誌』78巻4号（1985), 79-99.
〔24〕 村田晴夫『管理の哲学』（文眞堂, 東京, 1984).
〔25〕 ———,「全体性カテゴリーの復権と闘争」『武蔵大学論集』第30巻5・6号（1983), 43-71.
〔26〕 ———,「システム論における二つの流れ——カントとホワイトヘッド／バーナード」『武蔵大学論集』第28巻2・3号（1980), 1-37.
〔27〕 ———,「人間学から組織論へ——社会科学の方法に関する諸問題(1)——」『武蔵大学論集』第25巻1・2号（1977), 31-46.
〔28〕 持丸悦朗「メンガーの『Bedürfniss の理論』について」『三田学会雑誌』51巻5号（1958) 47-60.
〔29〕 Menger, C., *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre,* 1 Aufl. (Wien, 1871),（安井琢磨訳『国民経済学原理』, 日本評論社, 1937) 2 Aufl. (Leipzig, 1923),（八木紀一郎・中村友太郎・中島芳郎訳『一般理論経済学』, みすず書房, 1982).
〔30〕 ———, *Untersuchungen über die Methode der Socialwissenschaften und der Politischen Ökonomie insbesondere* (Leipziy, 1883),（吉田昇三訳『経済学の方法』日本経済評論社, 1986).
〔31〕 岡田純一『フランス経済学史研究』（お茶の水書房, 東京, 1982).
〔32〕 Popper, K. R., *The Poverty of Historicism,* (Routledge & Kegan Paul, London, 1957),（市井三郎訳『歴史主義の貧困』, 中央公論社, 1961).
〔33〕 Schwegler, A., *Geschichte der Philosophie im Umriss,*（谷川徹三・松村一人訳『西洋哲学史』上・下, 岩波文庫, 1939).
〔34〕 杉村広蔵「カール・メンガー社会科学方法論の研究」『商学研究』（東京商科大学）第6巻第1号（1926), 21-56.
〔35〕 ———,『経済哲学の基本問題』（岩波書店, 東京, 1935).
〔36〕 左右田喜一郎『経済哲学の諸問題』（佐藤出版部, 東京, 1917).
〔37〕 ———,『経済法則の論理的性質』（岩波書店, 東京, 1923).
〔38〕 ———,『文化価値と極限概念』（岩波書店, 東京, 1922).
〔39〕 高峯一愚『純粋理性批判入門』（論創社, 東京, 1979).
〔40〕 富田重夫『経済学方法論』（日本評論社, 東京, 1961, 増補版1986).
〔41〕 ———,「経済学における精密法則の論理的妥当性と現実適用可能性」『三田学会雑誌』50巻5号（1957), 28-43.
〔42〕 八木紀一郎「メンガーとヴェーバーにおける経済理論と〈経済人〉(Ⅰ)」『岡山大学経済学雑誌』第11巻第1号（1979), 143-173.
〔43〕 ———,「メンガーとヴェーバーにおける経済理論と〈経済人〉(Ⅱ)」『岡山大学経済学雑誌』第11巻第4号（1980), 837-877.
〔44〕 山田雄三（編）『経済学説全集9』「近代経済学の生成」（河出書房, 東京, 1955).

（慶應義塾大学大学院経済学研究科修士課程）